

長崎方言における人名のアクセント型

松浦 年男

長崎方言における人名のアクセント型

松浦 年男

1. はじめに

1.1. 目的

アクセントの対立を持つ言語・方言では、語彙的にアクセントパターンが決まる語と規則的にアクセントパターンが決まる語がある。このうち規則的にアクセントパターンが決まるものとしては外来語、複合語、二字漢語や固有名詞などを挙げることができる。これまで筆者は長崎方言に関して、松浦(2007a)、Matsuura (forthcoming)で外来語、松浦(2007b)で二字漢語、松浦(2008b)で複合語のアクセント型について、これらが音韻、形態構造から予測可能であることを示してきた。

本論文では、長崎方言の人名のアクセント型を観察し、その一般化を図る。そして、その音韻過程を示すことを通じて、長崎方言のアクセント現象が東京方言で提案されている規則によって捉えられることを示したい。

1.2. 長崎方言のアクセントの特徴

長崎方言は九州地方の長崎県下で話されている方言の一つである。アクセントの面では、A型とB型という2つのアクセント型を持つため、西南部九州二型アクセント方言と呼ばれている(木部2000)。A型は初頭2モーラ(ただし、2モーラ語の場合には第1モーラのみ)が高く実現し、B型は全体的に平板に実現するか、最終モーラが高く実現する¹。(1)に例を示す。なお、以下では高く実現する区間を[...]で囲んで示す。

(1) 長崎方言の二型アクセント

A型:[ア]メ(飴), [クル]マ, [トモ]ダチ, [バイ]オリン

B型:アメ(雨), オトコ, ムラサキ, パイナップル

長崎方言のアクセントの概要については坂口(2001)にまとめられているが、人名などの規則性については触れられていない。

¹ A型の音声実現については杉藤(1982)による研究があり、そこでは大阪方言と比較すると下がり方が明確でないことが示されている。

1.3. 論文の構成

2節では日本語の他の方言で人名のアクセントがどのような規則性を持つかについて概観し、本稿の論点を明らかにする。そして、3節では母語話者に対する調査結果に基づいて長崎方言の人名のアクセント型に見られる規則性を明らかにし、その結果をもとに4節ではアクセント型の音韻過程がどのようなものであるかを考察する。最後に5節でまとめと問題点を述べる。

2. 人名のアクセントに見られる規則性

長崎方言に関する議論に入る前に、まず人名のアクセントに見られる規則性について東京方言の研究と西南部九州二型アクセント方言の中でも多くの研究がある鹿児島方言について詳述し、長崎方言の分析をする上での論点を整理する。

2.1. 東京方言の人名のアクセント

東京方言は日本語の中で最も研究の進んだ方言の一つである。東京方言のアクセントの規則については秋永（2001）にまとめられている。本節では、秋永（2001）の記述に基づいて東京方言の人名のアクセントに見られる規則性について概観する。

人名のアクセントは、姓か名かで異なる規則性を示す。姓のアクセントは後部要素の形態素によって、(2)のように平板型になるか、(3)のように後ろから数えて3モーラ目を含む音節にアクセントが置かれる（以下、このパターンを逆3型と呼ぶ）かに分かれる。以下、アクセントは⁰で表し、平板型の時には語末に上付きで0をつける。

- (2) a. さの⁰ (佐野), うの⁰ (宇野), まの⁰ (真野)
 b. まつい⁰ (松井), やすい⁰ (安井), いまい⁰ (今井)
 c. まつもと⁰ (松本), やまもと⁰ (山本), みやもと⁰ (宮本)
- (3) a. み⁰き (三木), ま⁰き (真木), あ⁰き (阿木)
 b. ま⁰つ⁰の (松野), う⁰め⁰の (梅野), こ⁰ん⁰の (今野)
 c. まつ⁰かわ (松川), お⁰おかわ (大川), よし⁰かわ (吉川)

名のアクセントにも姓と同じく後部要素の形態素が強く関わる。例えば「也(や)」や「子(こ)」で終わる人名のアクセントは、原則として逆3型になるが²、「夫(お)」や「美(み)」で終わる人名は平板型になる(5)。

² ただし、「子」の前が3モーラ以上ある場合は「子」の直前にアクセントが置かれる。

(i) さくら⁰こ (桜子), かおる⁰こ (薫子), しょうわ⁰こ (昭和子, プロレスラーの名前)

- (4) a. ふ[゛]みや (文也), よ[゛]しや (芳也), し[゛]んや (信也), か[゛]ずや (和也)
b. ふ[゛]みこ (文子), よ[゛]しこ (芳子), きよ[゛]うこ (京子), ま[゛]さこ (雅子)
- (5) a. か^ゝずお^〇 (和夫), よ^ゝしお^〇 (芳夫), と^ゝしお^〇 (敏夫)
b. ま^ゝゆみ^〇 (真由美), よ^ゝしみ^〇 (芳美), か^ゝずみ^〇 (和美)

ただし、名のアクセントには長さによる制約もあり、2モーラの名は単独の形態素でも、複合語的な構成になっていたとしても初頭音節にアクセントがつく。

- (6) a. あ[゛]い (愛), き[゛]く (菊), ふ[゛]じ (藤)
b. ま[゛]お (真央), ま[゛]み (麻美), ゆ[゛]み (裕美)

以上をまとめると、人名のアクセントには、語構造と長さという2つの要因が関わるのがわかる。

2.2. 平山の法則と複合表現のアクセント型

鹿児島方言も長崎方言と同じく二型アクセント体系を持つが、その音声形は異なっている。A型は次末音節が高くなり、B型は末尾音節が高くなる(平山1951)。例を(7)に示す。

- (7) 鹿児島方言の二型アクセント
A型: [ミ]ズ, サ[カ]ナ, カゴ[シ]マ, オル[ゴー]ル
B型: ヤ[マ], オト[コ], トー[キョー], アルコー[ル]

西南部九州二型アクセント方言の特徴の一つに複合語の音調規則が挙げられる。平山(1951)は九州地方のアクセントの記述研究を行っており、九州地方の二型アクセント方言では、複合語のアクセント型は前部要素のアクセント型と同じになると述べている。

- (8) 平山の法則: 前部要素のアクセント型が複合語全体のアクセント型になる。

鹿児島方言の複合語のアクセント型も平山の法則に従っており、前部要素がA型ならば複合語全体はA型に、前部要素がB型ならば複合語全体はB型で実現する。

(9) 鹿児島方言の複合語アクセント

A 型 + A 型 → A 型 : [ハ]ー (葉) + サ[ク]ラ → ハザ[ク]ラ

A 型 + B 型 → A 型 : [イ]シ + ホト[ケ] → イシボ[ト]ケ

B 型 + A 型 → B 型 : ヤ[マ] + サ[ク]ラ → ヤマザク[ラ]

B 型 + B 型 → B 型 : イ[ロ] + シ[ロ] → イロジ[ロ]

鹿児島方言では、複合語以外の表現でも平山の法則に従うものがあり、人名も前部要素に同じ形態素を持つ人名は同じアクセント型で実現する (木部 1990, 2000)。

(10) a. 姓

A 型 : [カ]ワ (川) → カワ[ム]ラ (川村), カワ[カ]ミ (川上)

B 型 : ヤ[マ] (山) → ヤマム[ラ] (山村), ヤマシ[タ] (山下)

b. 名

A 型 : [ユ]キ → ユ[キ]コ, ユ[キ]エ, ユ[キ]オ

B 型 : ハ[ル] → ハル[コ], ハル[エ], ハル[オ]

さらに、二字漢語のアクセント型も前部要素によって決まる。小川 (2006) は平山 (1960) 掲載の二字漢語を数え上げ、96%の二字漢語が平山の法則に従っていると報告している。

(11) a. [テ]ン (天) : [テン]キ (天気), [テン]サイ (天才), テン[ゴ]ク (天国)

b. シ[ン] (新) : シン[キ] (新規), シン[ジン] (新人), シンサ[ク] (新作)

このように、鹿児島方言では平山の法則は強力であり、複合語だけにとどまらず、人名や漢語といった広い範囲の複合表現のアクセント型がこの法則に従っている。

2.3. 長崎方言のアクセント体系と複合語アクセント規則

平山の法則は長崎方言でも観察される (坂口 2001)。長崎方言における複合語アクセントの例を (12) に示す。

(12) 坂口 (2001) より。ただし用例の表記は一部変えている。

A 型 + A 型 → A 型 : [ハ]ナ + [ミ]ズ → [ハナ]ミズ

A 型 + B 型 → A 型 : [ミ]チ + クサ → [ミチ]クサ

B 型 + A 型 → B 型 : イロ + [カ]ミ → イロガミ

B型+B型→B型：オヤ+ユビ→オヤユビ

しかし、長崎方言では複合語のアクセント型に例外的なパターンが見られる。これらの複合語はいずれも前部要素がA型であっても複合語全体ではB型で実現するというものである。

(13) 坂口 (2001) より

A型+A型→B型：[ワタ]リ+[ロー]カ→ワタリローカ (*[ワタ]リローカ)

A型+B型→B型：[イナ]カ+モノ→イナカモノ (*[イナ]カモノ)

ただし、このような例外的な複合語は語彙的な例外ではない。松浦 (2008b) は 200 語の複合語の調査に基づき、複合語のアクセント型について (14) のように一般化した。

(14) 松浦 (2008b) による長崎方言の複合語アクセントの一般化

a. 前部要素が2モーラ以下ならば、前部要素のアクセント型が複合語全体のアクセント型になる。(平山の法則)

b. 前部要素が3モーラ以上ならば、複合語全体のアクセント型はB型になる。

(15) 松浦 (2008b) 掲載の複合語の例 (表記を一部改めている)

a. 前部要素 = 1 モーラ

[ハ]ー (A型) → [ハザ]クラ

b. 前部要素 = 2 モーラ

[カ]オ→[カオ]ミセ, [ウ]メ→[ウメ]センベ, [チョ]コ→[チョコ]マン
ジュ

c. 前部要素 = 3 モーラ

[ギタ]ー→ギターブ (*[ギタ]ーブ, ギター部)

[コー]ド→コードケー (*[コー]ドケー, 高度計)

[テレ]ビ→テレビバングミ (*[テレ]ビバングミ)

d. 前部要素 = 4 モーラ

[ウメ]ボシ→ウメボシパイ (*[ウメ]ボシパイ)

[オレ]ンジ→オレンジバタケ (*[オレ]ンジバタケ)

[セキ]タン→セキタンジドーシャ (*[セキ]タンジドーシャ)

e. 前部要素 = 5 モーラ

[コン]サート→コンサートゴ (*[コン]サートゴ, コンサート後)

[クリ]スマス→クリスマスケーキ (*[クリ]スマスケーキ)

[チョコ]レート→チョコレートマンジュー (*[チョコ]レートマンジュー)

このように、長崎方言と鹿児島方言は同じ西南部九州二型アクセント方言に分類されるが、複合語アクセントの規則性が異なるのである。

長崎方言と鹿児島方言の違いは二字漢語のアクセント型にも観察される。松浦 (2007b) は、二字漢語 281 語を調査し、長崎方言の二字漢語のアクセント型は鹿児島方言と異なり各要素の音韻構造によって決まることを示している。つまり、同じ前部要素を共有していても異なるアクセント型で実現するのである。

(16) 長崎方言の二字漢語

A 型：高価，高貴，高位，高所，高度

B 型：高官，高校，高級，高低，高尚

以上のように、長崎方言では、複合語アクセント規則の内容が鹿児島方言と異なり、また、複合語と他の複合表現ではアクセントの規則性が異なることが分かる。このことから、人名についても長崎方言は鹿児島方言と異なる規則性が観察される可能性がある。そこで、長崎方言の母語話者に対して聞き取り調査を行った。その結果を 3 節で報告する。

3. 人名のアクセント型の規則性

3.1. 調査方法

調査語彙として姓名を合わせて 51 個作成した。馴染み深い人名などはアクセントも語彙化されていることが十分に考えられ、そういったものばかりを用いると、アクセントの規則的な側面を明らかにするという研究目的から外れてしまう。そこで、調査語彙には普段なじみの無いと思われる人名も入れている。調査語彙の全てを (17) に挙げる。

(17) 調査語彙

春，春夫，春彦，春子，春美，夏，夏夫，夏彦，夏子，夏美，裕太，裕介，裕平，裕子，裕香（ゆうか），裕美（ゆみ），銀，銀太，銀介，銀子，銀平，浩太，浩平，由香，美香，杉，杉田，杉山，杉村，杉木，松，松田，松山，松村，松木，大田，大山，大村，大木，東田，東山，東村，北田，北山，北村，西田，西山，西村，南田，南山，南村

また、裕香（ゆか、ゆうか）のような曖昧性を排除するために、調査語彙には全て読み方を付した。話者は22歳（必要な場合はYF-09と呼ぶ。以下同じ）、53歳（MF-07）、59歳（MF-06）、62歳（MM-03）、78歳（OF-05）の5名で、62歳の話者を除き女性である。話者は全て言語形成期を（長崎市に限定せず）長崎アクセントが話されている地域で過ごしている。話者には調査語彙が全て人名であることをあらかじめ説明し、単独形と人称接尾辞「さん」をつけた形で読むよう指示した。調査の結果、255個のトークンが集まった。

3.2. 調査結果

3.2.1. 長さアクセント型

まず、全体の長さアクセント型について考察していく。長さに注目すると、2モーラでは全てA型になり、3、4モーラではどちらの型もほぼ半数ずつ見られるようになる。また、5モーラでは全てB型になる。長さアクセント型の関係をまとめたものを(18)に示す。

(18) 長さアクセント型

	A型	B型	合計
2モーラ	40 (100.0%)	0 (0.0%)	40
3モーラ	47 (47.0%)	53 (53.0%)	100
4モーラ	40 (42.1%)	55 (57.9%)	95
5モーラ	0 (0.0%)	20 (20.0%)	20
合計	127 (49.8%)	128 (50.2%)	255

まず、2モーラについて見てみると、全てA型で実現している。調査した人名の東京方言における発音は全て起伏式であり、音声的に「高低」となる点で共通している。

(19) ゆ^ゝか—[ゆ]か、み^ゝか—[み]か、ぎ^ゝん—[ぎ]ん

5モーラの名前は東山、東村、南山、南村の4つであり、東京方言では、いずれも前部要素末の音節にアクセントが置かれるのに対して、長崎方言では下降を伴わないB型で発音される。

(20) ひがし^ゝやま—ひがしやま、ひがし^ゝむら—ひがしむら
 みなみ^ゝやま—みなみやま、みなみ^ゝむら—みなみむら

このように、5モーラの名では2モーラのような音声的な類似性は見られない。しかし、語構成に注目すると、どれも3モーラ+2モーラという構造になっていることが分かる。前部要素が3モーラになるとB型になるというのは2節で指摘した複合語で見られる規則性と同じである。もし、前部要素が長いためにこれらの人名がB型になったのであるならば、これらの人名のアクセント型がB型になった理由を複合語と同じようにして説明することができる。4節ではこの可能性に基づいた分析を行うが、いずれにしろ2モーラ+3モーラの名（例えば高柳，北林など）などのアクセント形を調べる必要がある³。

3.2.2. 前部要素とアクセント型

次に、前部要素ごとにまとめた場合について考察する。ここでは長さの問題を排除するために2モーラ，5モーラの名は除外した。もし、鹿児島方言と同じく、人名のアクセント型が平山の法則に従うならば、前部要素が同じ人名は一貫して同じアクセント型になることが期待される。しかし、同じ前部要素を共有していてもアクセント型が一貫して現れることはほとんど無かった。(21)に前部要素ごとのアクセント型のトークンを示す。A型の割合について高い順に左から配列している。

(21) 前部要素とアクセント型

	裕	銀	浩	春	夏	西	松	杉	大	北	南	東	合計
A型	20	16	5	10	10	7	8	7	3	1	0	0	87
B型	5	4	5	10	10	8	12	13	17	14	5	5	108

このように、前部要素とアクセント型には一貫した関係はほとんど見られないことから、長崎方言の名のアクセント型が鹿児島方言のように平山の法則によって決まるとはいえないことが分かる。

3.2.3. 後部要素とアクセント型

最後に、後部要素によってアクセント型が決まるかを見ていく。前部要素の場合と同じく、長さの問題を排除するために、2, 5モーラの名は除外している。「子」「彦」「介」「太」「香」を後部要素に持つ人名は全てA型になった。一方、「夫」「美」「木」を後部要素に持つ人名は全てB型になった。「村」「田」「山」「平」を後部要素に持つ人名はA型、B型どちらとも現れた⁴。前部要素の場合と同じように並べた表を(22)に示す。

³ 3モーラ+1モーラの名もB型になるが、これらは「田」が後部要素にある人名のため、前部要素の長さが問題なのか後部要素が原因なのか分からない。

(22) 後部要素とアクセント型

	子	彦	介	太	香	村	田	山	平	夫	美	木	合計
A型	20	10	10	15	5	16	7	3	1	0	0	0	87
B型	0	0	0	0	0	9	28	22	14	10	10	15	108

ここで東京方言のアクセントと長崎方言のアクセント型に興味深い対応関係が見られる。すなわち、原則として東京方言において初頭2モーラにアクセントのある人名は長崎方言ではA型になり、東京方言でその他のパターンになる人名は長崎方言ではB型で発音されるのである。これは「子」や「美」のように全ての語がどちらかの型になったものだけでなく、「村」「田」「山」のように、人名によってA型、B型に分かれるものについても言える。(23), (24), (25)に「村」「田」「山」を前部要素にもつ人名のアクセント型を東京方言におけるアクセントと合わせて示す。

(23) 「村」を後部要素に含む人名のアクセント型⁵

表記	杉村	松村	大村	西村	北村
東京	2	2	0	2	0
A型	5	5	3	3	0
B型	0	0	2	2	5

(24) 「田」を後部要素に含む人名のアクセント型

表記	西田	杉田	北田	松田	大田	東田	南田
東京	1	1	0	0	0	0	0
A型	4	2	1	0	0	0	0
B型	1	3	4	5	5	5	5

⁴「平」は1名の話者のみA型で発音したものであったので例外として以下では扱わない。

⁵「東京」には東京方言において語頭から数えたときのアクセントの位置(モーラ)を数字で示す。0は平板型を意味する。

(25) 「山」を後部要素に含む人名のアクセント型

表記	松山	杉山	大山	北山	西山
東京	2	0	0	0	0
A 型	3	0	0	0	0
B 型	2	5	5	5	5

「大村（おおむら）」「杉田（すぎた）」は東京方言で平板型であるにもかかわらず長崎方言では A 型が多いという対応関係になっているが、それ以外では一応「初頭 2 モーラ - A 型」「それ以外 - B 型」という対応関係が見られる。また、同じ対応関係は 3.2.1. 節で指摘した 5 モーラの名でも見られるものである。今回調査した 5 モーラの名の場合、東京方言ではアクセントはどれも 3 モーラ目に置かれるが、長崎方言では B 型で発音されている。

3.3. 調査結果のまとめ

本節では長崎方言における人名のアクセント型の調査結果を報告した。調査の結果、長崎方言の人名のアクセント型は、前部要素の長さとは後部要素によって決まることが分かった。4 節ではこの結果に基づいて人名のアクセント型の音韻過程について考察する。

4. 人名のアクセント型の音韻過程

この節では 3 節で明らかにした長崎方言における人名のアクセント型に見られる規則性が外来語と同じ音韻過程によって派生されることを示す。

4.1. 長崎方言の外来語アクセントの分布と音韻過程

3 節では東京方言と長崎方言の人名のアクセントについて (26) のような対応関係が見られることを指摘した。

- (26) a. 東京方言で初頭 2 モーラにアクセントがあれば、長崎方言で A 型になる。
 b. 東京方言でその他のアクセントになれば、長崎方言で B 型になる。

この対応関係は人名に限定されるものではなく、外来語でも見られるものである。

Matsuura (forthcoming) は 761 語の外来語について、東京方言のアクセントパターンと長崎方言のアクセント型の対応関係を分析し、東京方言で初頭 2 モーラにアクセントが置かれる外来語は長崎方言では A 型で発音され、東京方言で他のアクセントパターンに

なるものは長崎方言ではB型で発音される傾向にあることを明らかにしている。例とまとめを(27), (28)に示す。

(27) 外来語アクセントの対応

東京方言：イ⁰ースター, アカ⁰デミー, アルマ⁰ジロ, アメリカ⁰

長崎方言：[イー]スター, [アカ]デミー, アルマジロ, アメリカ

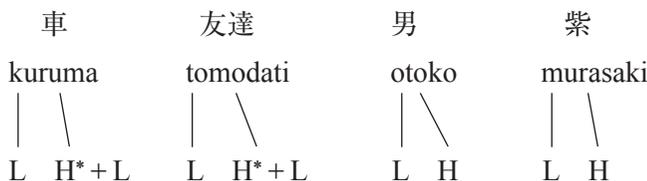
(28) 外来語におけるアクセントの対応関係 (Matsuura, forthcoming)

東京方言アクセント	A型	B型	合計
第1, 2モーラ	352 (93.6%)	24 (6.4%)	376
その他	75 (19.5%)	310 (80.5%)	385
合計	427 (56.1%)	334 (43.9%)	761

このように、外来語と人名はアクセントパターンとアクセント型の対応関係において、共通した特徴を持っている。これは、外来語と人名のアクセント型が同じ原理により説明できる可能性を示唆している。以下では外来語のアクセント型の基底表示と派生を示す。

松浦(2008a)による音響音声学的分析では、長崎方言におけるA型とB型の違いとして、初頭2モーラにおいてA型のほうがB型よりも高いF0値で実現すること、A型は第3モーラ以降で下降が見られることを指摘している。この違いを反映した音声表示として(29)を仮定する。

(29) A型(車, 友達)とB型(男, 紫)の音声表示⁶



このうち、第1モーラのLトーンはA型、B型に共通していることから、基底形では句レベルに対して指定されていると仮定する。外来語の場合、アクセント型に関してほぼ予測可能なので、基底表示ではアクセント型の区別はないはずである。楳垣(1944)によれば日本語の多くの方言において、外来語はアクセントを持つ形(下降調)で実現することが多いことから、長崎方言の外来語の基底形についても外来語は下降調のメロディーであ

⁶ A型2モーラ語(雨)は第1モーラのみ高いが、この実現形は別の規則により派生され则认为る。

る H*+L メロディーが指定されていると考える。

(30) 基底形 /_{H*+L}iisutaa/ /_{H*+L}akademii/ /_{H*+L}arumaziro/ /_{H*+L}amerika/

この基底表示に対して、東京方言と共通のアクセントを付与する規則が適用される。紙幅の関係上、この規則について詳細に述べることはできないが、ここではラテン語アクセント規則 (31a) と平板アクセント規則 (31b) の2つを仮定する (東京方言の外来語アクセント規則については Kubozono 1996, 2006 を参照のこと)。途中段階の派生を (32) に示す。

(31) アクセント規則

a. 平板アクセント規則

全体が4モーラで、語末が軽音節の連続で、かつ語末音節に挿入母音を含まないならば、[0] を指定せよ。

b. ラテン語アクセント規則

アクセント (*) に関して何も指定がないとき、次末音節が重音節ならばそこに、軽音節ならばその一つ前の音節にアクセントを付与せよ。

(32) 基底形 /_{H*+L}iisutaa/ /_{H*+L}akademii/ /_{H*+L}arumaziro/ /_{H*+L}amerika/
 ア規則 _{H*+L}i*isutaa _{H*+L}aka*demii _{H*+L}aruma*ziro _{H*+L}amerika⁰

そして、ここで得られた表示に対して H*+L メロディーの結合を行う。ここで、H*+L メロディーを結合する規則には初頭2モーラにアクセントがあるときのみ結合できる、というアクセントの位置を参照する制約があると考えられる。規則を (33) に、派生を (34) に示す。

(33) H*+L メロディー結合規則

が初頭2モーラにあれば、第2モーラに H+L メロディーを結合せよ。

(34) ア規則 _{H*+L}i*isutaa _{H*+L}aka*demii _{H*+L}aruma*ziro _{H*+L}amerika⁰
 H*+L 結合 (34) i*isutaa aka*demii aruma*ziro amerika⁰
 / / 不適用 不適用
 _{H*+L} _{H*+L} _{H*+L} _{H*+L}

そして、結合されなかった H*+L メロディーは B 型のトーンメロディー H トーンに変換

され (35), それが第2モーラに結合し (36), 最後にLメロディーが第1モーラに結合される (37)。派生を (38) に示す。

(35) トーンメロディー変換規則

どのモーラにも結合されていない H*+L メロディーを H メロディーにせよ。

(36) Hメロディー結合規則

Hメロディーを第2モーラに結合せよ。

(37) Lメロディー結合規則

第1モーラに何も結合されていなければ, 第1モーラにLを結合せよ。

(38) トーン変換 (35)	不適用	不適用	_H aruma*ziro	_H amerika ⁰
H結合 (36)	不適用	不適用	aruma*ziro	amerika ⁰
			H	H
L結合 (37)	iisutaa	akademii	arumaziro	amerika
	\	\	\	\
	L H*+L	L H*+L	L H	L H

このように東京方言と共通のアクセント付与過程を仮定することで, アクセント規則の一般性を説明し, 同時に H*+L メロディーの付与において制約を仮定することで長崎方言の個別性も説明している。4.2 節では人名のアクセント型をこの音韻過程によって説明する。

4.2. 人名のアクセント型の基底表示と派生

まず, 基底表示について検討する。3 節で見た人名のアクセント型に関する規則性は (39) のようにまとめられる。

(39) 人名のアクセント型の規則性

- a. 前部要素が3モーラならばB型になる。
- b. 前部要素が2モーラ以下ならば, 前部, 後部に現れる形態素の組み合わせによってA型かB型かが決まる。
- c. 全体が2モーラならばA型になる。

このうち (39b, c) は東京方言と共通である。「夫」や「美」のように全体を平板型にす

る後部要素は、「虫（むし）」や「病（びょう）」のように複合語のときのアクセント型に関する指定（外来語における〔0〕指定と同じもの）を別に持っていると考え。一方、前部要素の音配列によってアクセントパターンが決まる人名は、その規則（群）を適用するための特別な指定（ここでは〔D〕としている）を持っていると考え。また、2モーラの名はA型（下降調）で実現することから、人名も全て基底形ではH*+Lメロディーを持つと仮定する。このようにして人名の基底表示が得られる（40a）。このアクセントの指定は全体の長さとは関係しないため、2モーラ、5モーラの名にもアクセントの指定はされている（40b）。

(40) 人名の基底表示

- a. /_{H*+L}natu-ko/ (夏子), /_{H*+L}haru-mi,⁰/ (春美), /_{H*+L}sugi-mura,^D/ (杉村)
 b. /_{H*+L}yu-mi,⁰/ (裕美), /_{H*+L}higasi-mura,^D/ (東村)

まず、〔D〕の指定を持つ人名に対して音配列に基づき平板型（0）の指定を持たせる規則が働くと考える。こういった音配列ならば平板型になるかを詳述するのはこの論文の目的から外れるため⁷、緩すぎるが（41a）のようにしておく。また、2モーラの名についてもこの段階でアクセントの指定が書き換えられると考える。ただし、5モーラの名はこの段階での書き換えを必要としないので規則は適用されない。

(41) アクセント指定書き換え規則

- a. 〔D〕を後部要素に持つとき、音配列の条件に適合すれば〔0〕にせよ。適合しないときは〔D〕の指定を削除せよ。
 b. 全体が2モーラならば、アクセントの指定（〔0〕もしくは〔D〕）を削除せよ。

次に、ラテン語アクセント規則（31b）と平板化規則（42）を適用する。そして、この表示に対して外来語と同じくH*+Lメロディー結合規則（33）、が適用される。全体の派生を（43）に示す。

(42) 平板化規則

- 〔0〕の指定を持つ要素が後部要素にあるならば、全体を〔0〕にせよ。

⁷「田」を後部要素とする人名に関して佐藤（2007）において詳細に検討されている。

(43) 基底形	/ _{H*+L} sugi-mura/	/ _{H*+L} sugi-ta/	/ _{H*+L} sugi-yama/
書換規則 (41)	_{H*+L} sugi-mura	_{H*+L} sugi-ta	_{H*+L} sugi-yama, ⁰
(42), (31b)	_{H*+L} sugi*mura	_{H*+L} su*gita	_{H*+L} sugiyama ⁰
H*+L 結合 (33)	sugimura	sugita	不適用
	$\begin{array}{l} / \quad \\ \text{H}^* + \text{L} \end{array}$	$\begin{array}{l} / \quad \\ \text{H}^* + \text{L} \end{array}$	
トーン変換 (35)	不適用	不適用	_H sugiyama ⁰
H 結合 (36)	sugimura	sugita	sugiyama
L 結合 (37)	$\begin{array}{l} \quad \backslash \\ \text{L} \quad \text{H}^* + \text{L} \end{array}$	$\begin{array}{l} \quad \backslash \\ \text{L} \quad \text{H}^* + \text{L} \end{array}$	$\begin{array}{l} \quad \backslash \\ \text{L} \quad \text{H} \end{array}$

これら規則群を仮定することにより、前部要素が3モーラ以上のときにB型のみ現れるという制限を説明できる。すなわち、そのような構造を持つ場合、アクセントは第3モーラにつくため、H*+Lメロディー結合規則が適用できずにB型になるのである。

(44) 前部要素が3モーラの語の派生

基底形	/ _{H*+L} higasi-mura, ^D /	/ _{H*+L} minami-yama, ^D /
書換規則 (41)	_{H*+L} higasi-mura	_{H*+L} minami-yama
(42), (31b)	_{H*+L} higasi*mura	_{H*+L} minami*yama
H*+L 結合 (33)	不適用	不適用
トーン変換 (35)	_H higasi*mura	_H minami*yama
H 結合 (36)	higasi*mura	minami*yama
L 結合 (37)	$\begin{array}{l} \quad \backslash \\ \text{L} \quad \text{H} \end{array}$	$\begin{array}{l} \quad \backslash \\ \text{L} \quad \text{H} \end{array}$

このように、人名のアクセント型は外来語と同じ過程で派生されるのである。

5. 結論と今後の課題

5.1. まとめ

本論文では長崎方言の人名のアクセントについて考察した。人名のアクセント型がA型とB型のどちらの型になるかは、全体の長さ、前部要素の長さ、後部要素の形態素、全体の音配列によって予測可能であることがわかった。また、東京方言と同じくアクセン

ト付与規則があると仮定した場合、外来語と同じ規則により派生され、トーンメロディー結合の規則によって、長崎方言と東京方言の違いが出ることを示した。

5.2. 今後の課題

本論文で扱った人名は各要素が1, 2モーラのもののみである。注2でも指摘したように、3モーラ+子の場合、アクセントは「子」の直前、すなわち第3モーラに置かれる。そうすると、そのような人名はB型で発音されることが期待される。また、このほかにも窪蘭(1998)は後部要素が「太郎」となる人名が、前部要素の音韻構造によって(45)のようにアクセントパターンが決まることを示している。

- (45) a. 1音節→平板型：こたろう⁰, しんたろう⁰, きゅーたろう⁰
 b. 2モーラ2音節→¹たろう：いち¹たろう, ゆめ¹たろう, らく¹たろう
 c. 3モーラ以上→¹た¹ろう：サンバ¹た¹ろう, ウルトラマン¹た¹ろう

もし、同じ規則性が長崎方言にも見られるならば、初頭2モーラにアクセントがあるのは(45b)にある前部要素が2モーラ2音節のときのみなので、そのときはA型、他のときはB型になるはずである。

また、本稿ではアクセント規則として外来語アクセント規則を用いたが、「東村」や「南山」のアクセント型については「前部要素の最終モーラにアクセントを付与せよ」という複合語アクセント規則を仮定し、その後にはトーンメロディー結合規則を仮定することによっても記述することができる。本稿では、3モーラの名が初頭モーラにアクセントが来る(例：ふ¹みや, *ふみ¹や)ことから、外来語アクセント規則を用いたが、全体の長さによってアクセント規則が変わることも考えられる。どちらの規則を用いた方がよいかは稿を改めて考察したい。

日本語の方言アクセント研究では、様々な語種に見られるアクセントの規則性について研究されてきたが、語種間に見られる共通性や相違性が何に基づくものかを考察し続けることにより、方言間の違いを超えた日本語のアクセントの性質が解明されるだろう。

謝辞

本研究のための調査にあたりご協力いただきました浦川薫さん、河野泰子さん、笹栗淳子さん、田中重光さん、田中節子さん、高木博さん、高木ふさ子さん、高木麻里子さんに感謝いたします。

参考文献

- 秋永一枝 (2001) 「アクセント習得法則」『新明解日本語アクセント辞典』東京：三省堂
- 平山輝男 (1951) 『九州方言音調の研究』東京：学界之指針社
- 平山輝男 (1960) 『全国アクセント辞典』東京：東京堂出版
- 木部暢子 (1990) 「鹿児島市方言のアクセント法則」徳川宗賢 (編) 『方言音調の諸相—西日本 (1) —』(科研費報告書：No. 01642007), pp.127-139
- 木部暢子 (2000) 『西南部九州二型アクセントの研究』東京：勉誠出版
- Kubozono, Haruo (1996) Syllable and accent: Evidence from loanword accentuations. *The bulletin* (Journal of Phonetic Society of Japan) 211, pp.71-82.
- 窪蘭晴夫 (1998) 「金太郎と桃太郎のアクセント構造」『神戸言語学論集』1, pp.35-49
- Kubozono, Haruo (2006) Where does loanword prosody come from? A case study of Japanese loanword accent. *Lingua* 116, pp.1140-1170.
- 松浦年男 (2005) 「島原方言における音調の音声的実現と基底表示」『日本言語学会第131回大会予稿集』pp.72-77
- 松浦年男 (2007a) 「長崎方言におけるアクセントの受容」関西音韻論研究会 (PAIK) 5月例会配布資料 (5/19, 神戸大学)
- 松浦年男 (2007b) 「長崎方言における二字漢語のアクセント型」『日本言語学会第134回大会予稿集』, pp.240-245
- 松浦年男 (2008a) 「長崎方言における語音調の音韻論」博士論文, 九州大学
- 松浦年男 (2008b) 「長崎方言における例外的複合語アクセントの生起条件」日本音韻論学会 (編) 『音韻研究』第11号, pp.11-18, 東京：開拓社
- Matsuura, Toshio (forthcoming) Position sensitivity in Nagasaki Japanese prosody. to appear in *Journal of East Asian Linguistics* (a special volume on loanword phonology of East Asian languages).
- 小川晋史 (2006) 「日本語諸方言の2字漢語アクセント」修士論文, 神戸大学
- 坂口 至 (2001) 「長崎方言のアクセント」『音声研究』5 (3), pp.33-41
- 佐藤大和 (2007) 「音韻およびその配置とアクセント—「柴田さんと今田さん」その後の考察—」音声文法研究会 (編) 『文法と音声 V』pp.159-173, 東京：くろしお出版
- 杉藤美代子 (1982) 『日本語アクセントの研究』東京：三省堂
- 榎垣 実 (1944) 『日本外来語の研究 増補版』大阪：青年通信社